秋の部

中村俊定文庫
文庫 18
287

難波津の菴主にありて。よなの
世に上に付し仲秋の頃かひより。
つゝみにと首くぐりて花子こあり
訓さしめくぐふにみ栄螺の貝に。
芋もりしんやうなる子。細ら伯母一母にも乱信す。
よく鶴もたらず。まさに。諸葛亮に
すゝふて。菜畑作らんとおもひたちぬ。

宗良文庫
七五五

せゝみてる小園す。草もの生さまゝ。
叢深ふかせくまゝく。名もなき花ども
そゝ生しい茂生る。藤葉やうの
ものもあるゝ。色もまた花をかく
さゝはぬそのうまゝ悠慢として。
果ゝ。塵塚の蓬を助るのみや。
世の者ゝ。ちつゝみ。はゝ自ら花ふき
ちらす。梅ゝ原ゝ。かゝゝみ。

蛾眉さゝふる花。そゝ花のゝ世ゝして。
ひゝたゝやゝのゝ石みゝ及ゝ。武蔵野の名ゝ
いも賞ゝ。薄ゝ分ゝ二ゝ里のゝ外ゝ恥寸。
隅田川の流ゝ。ゝ。名ゝ。都ゝ名ゝ。ゝ。
さゝゝ賞ゝ薄大堰川。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
名ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
おゝ。ゝ。ゝ。感慨深ゝ。

惜めども更行雲のそまうん。
石根もるる。十六夜は月の冴け
ゆくらう。あちまち底行月もと。
小車乃そまるるあり。昔まれ淋
しう時き昔めし。ふる月まうつ星行。
前日比の月はあるうち幾夕。三夕の
新みる。魚も多を駕れ粉ふかの菅ふ。
つくへうつろひ一時。罪ふて

配所の月とうらん。十三夜は月ふ。龍
明うう。いも時れやみ。故生とこの魚は
いと悟まぬ。光の月乃龍まうまして。
時の七明ふ寸文ふ龍まう。楠三成ふ
ふまみ龍る。粉み十夜うあれ。
神祇ふ度龍胥。千とせふ松ふ鶴の
巣龍。さうれ石乃蒙とうて。然乃
穴ふう。著ふからぬ鮭ふうまう。

書物を徳のうるはしきものとかつ〳〵弱て。香ゝ二夜の月を撫ぜ。
ものゝ哀とも秋のこゝろを尋ん
云ん 正立堂四季ひのもの和
歌月中自在祥自序

宗像神社文庫

中村俊定文庫

宿吟一夜歌仙

名月やいの奥ゆかを花
くるゝまもとつ波新灯 柳逵亭 祥
口上もゆ乃栗ゑ菊添ゝ
長屋の坂を逢ゝ見返る
傘ゆ丁度間ゑ合ふ〳〵対面
菊ゑ著せゝ呈ゝ狭 逵

働くさも指さす水車
祭たる市井京なる中
紙扇もくみ烏よ枯柳
ふゝえまぶちも併の新
心合ふて袖引きつくも愛
一首覚へんをとゝいす
明窓ゝ子も裸なる蜜小舟
夕山丹暴風とゝ吹やう

書明丹優婆塞なるかの如
拍子ト の つる乃殺くるゝハ
志賀越よ兎も花を走るう
蜂の巣蔭ゝ袖笠なる人
奥なる間の唐蔭ハ雛を明渡
二潮ゝ指て思ふさつき
ゆきとゝ思ひつゝ方の行衆
一升夕丹橙の五月雨

墨深くそめなして古傳家
母のを伐戔伯澂の旦房
蓼くそめて伝てる識る初源雪
火傷母懲こくあるる貝銭
出山の釋伽をきん五ゑ出て
何のなかくよりを裏唄
新ゑ月天物ハ調市戻り
中母当る乎打きる稲妻

錦木伐積ゑて夜の戸うきむ
ちぐやあるいみおるびきゆ姫
今宵ゑ暗もまさすぬを飢
湯島祢冈の宮ゑ釣合ひ
赤本ゑ花咲ちぐい桃古乃
きくやつかく壷菫ゑり

思古人于茲月之吟拾遺

皆人ぞ盛のさかりや秋の月　貞徳

名月置後月百

俤ぞ姨捨山の友　芭蕉

名月や門に立く人の影　神凡帳其角

名月や柳の枝を空へ吹く　嵐雪

名月や打と出まふ庭まはり　治徳

唐士子冨士あらはの月もろよ　素堂

十三夜題詠　歌仙

新蕎麦の実も闌あやるし　啓史

東西（今ぞ）お撲ぬふ〻て、

大服茶もあらうちあり　桂

俵果〻縄手の麥みたまし、

石臼法なる鍋の突やう　啓

堂上の至尊昭丹信てもうる　啓
薫物湯く白しかハ由し　徑
賈銭又らふもかついでを義　啓
引のこみ町子本隠れく　雪　徑
姉彷さまを待る衆会仏　啓
子を拾ふ方丹氣やさるん　徑
雪椒かゝき浮せ示恵八安　記　啓
盃物らす沁銭出さげる　徑

脱て垂羽織隠くく書の月　啓
屋ろく酒もを多記読む　徑
芸あるく則　寺へ紙五枚　啓
真の聖　来丹豆於山伏　徑
禮蛮きく言蠻蛮く　面ラ、
風ゝ習つく面が降せて　啓
女房や家らくの細盥　徑
住たをれの京於為さく　啓

すゝ虫の声もまぶ神無月　桂
雪ふり行義みくしもゝ　啓
軒みぬる筆をとれば冬ゝる船　桂
閑居の古屋はけ系ば蛙ゝる　啓
秋ハ蓼の茂きて風を吹ゝす　桂
山さわしのよみ夏ふ松のゝ　啓
吹てゝん義瓦の吹ゝ笛ゝゝ　桂
雑道ゝ四ゝ悪ふ沢知里　啓

炉ゝひみ隣を聞けゝ三菅野や、
紙帽の光ゝ里ゝ泉ゝ　桂
道付ゝ猫ゝる犬の奥歩行　啓
てんぐん林けふ及りハゝ　桂
蓑蓑知ゝ奴人ゝもの鉄ゝふ、
雪ゝ名ゝ新崖ふ山吹　啓

清光

きふの月戸さゝぬ御代の御ゝ那　盤谷
水底をるめの欲てゝふの自　和推
新葉ゝゝ育ち育ち成き孫哉　存義
犬のゝを孫ゝみけぬ月見哉　有佐
御八道学もふ一学ふ子自　平砂
名ゝゝおゝゝ人み回成かゝ　禾仲
明月ゝ底のゝるホハ松檜　祇丞

心映も寅のなる歌あまきふの日　買明
ふ鶏桜一まゝ自ふ月見う那　樓川
秋の夜を裸み者りふの月　渭北
蛤乃音ゝ写る更ゝきふ成ゝ　湖す
遠しゝの祭をゝゝ新月ゝゝ　吉原
名自ゝ舷身清て仰向ゝ　和專
名ゝゝ成ゝ成ゝちゝ寄る芝蔦　紀逸
月満まきふ放さまて鯉ゝ浮　再賀

名月の海やとなりの雲乃東　石腸
名月や今宵の縁てある筵の松　蝸名
名月やいく月梅のあらし海　角浪
名月や蕎をとなりの日傘　文室
武蔵野や中の町うりきふの風　超雪
名月や烟りの来ぬ所とする　秀億
名月の行衛や子の仲津浦　木啓
世の中や月見や押さえの宮人　嘉廷

鶴の兎角智る者月見うき　栖鶴

栖隠

名月やあこれ人の二度歌名　春来
よ原を忘るる男ふ名味う月　常仙
中屋敷稜おの夜宮ふの月　秋風
名月や江戸をとせる紅和　羊素

良夜

名月や云業の宗ふの宗竹　梅光

月々青海の事は滴恵氏　雪彩

中秋

名月や〳〵不入押遠里　茂陵

月のふ楷すさまじ囲子ゟ　文喬

海浩拙海天台宗意成院初楊所と名り引越

拙かゝる月ゟ高家院　桃兆

名月や名も寵ぬ物人も又　五鳳

心眼の境を磨く月拭ゟ　桂祥

三五

名月や今宵月者ゟ紀たゝきし　芝光

名ゟ〳〵やこゝゟも更て人通里　汀石

名月や雲の墨ひも女文字　竹瓦

新月や酒る物みゟ酒ゟゟ　尾谷

法の中ゟ宿ゟ屋ゟの月　倫和

皆学ゟ見る心〳〵ゟ月きふ　方國

名ゟ〳〵やいゟ拙ゟ三保の松　節士

名月や 藪より吹る五時車　珪瑠

みそらの図画も他心自見ぬ　両谷

翌の自木の葉乃面も行秋哉　玉珂

蛾捨よかくる物あり宮の月　女青高

新清く名月を呑む山や小盃　木芝

海もうゑ新月の秋の山　桂祥

軸

一年の二つの月や十三夜　啓史

こゝろ人の初秋あてはなし武陽の御達亭の
あるじ武秋門戸須ゑ引く自宅の月見る
ゑる宿物おのみ月光を看く地上の名を
ゑひ机上の書をもく宿吟欲仙あるを又
名みめて〳〵二秋の月みゑ並〳〵んく
面白き玉を地の始〳〵て古をふふて八
古人の白を写し今を見て八面前の白髪
書ゑ〳〵画彩〳〵秋の花こゝんよりり

女郎の菜吟八世々多し山わるゝ白ゆ
菜とゝ分して秋の竜田へゝる色ゝ東方朔ら
家物も変のための菜吟ひと言へば行末なく
ゝしの秋を笑しめへと書て伏盤若
きりゝみ書付り也

延享四年秋九月

彫工　魚川